特集1 精度・威力を上げる!!
必勝秘テク

Tennis Classic break

10
2017 OCTOBER No.465
テニスクラシック・ブレーク
www.tennisclassic.jp
fb.me/tennisclassicbreak

特集 出場全選手掲載!!
「全小2017」
BEST16以上
全選手コメント付き!!

[REPORTS]
★全日本ジュニア ★インターハイ ★インカレ

増田健太郎プロ解説"史上最高から学ぶ"
フェデラーのテニス
「王者のサーブ術1」

注目
ラケット70本
本気試打
"秋の陣"
PURE DRIVE /ULTRA / EXTREME...

佐藤哲哉プロ直伝
ダブルスポジショニング講座

上級者への条件をコンプリートせよ
<最強の盾>4割を得点!!
絶対に取るリターンゲーム

巻頭 上級者だけが知っていた!!
ショットの精度・威力を上げる

目からウロコの必勝秘テク

フォアハンド
バックハンド
ボレー

1980年6月10日第3種郵便物認可／第38巻 第12号 通巻465号／2017年9月5日発行・発売（毎月5日発行・発売）

2017 南東北インターハイ 団体戦

平成29年度全国高等学校総合体育大会

第74回 全国高等学校対抗テニス大会

○期日／8月2日(水)～4日(金)　○会場／会津総合運動公園テニスコート、あいづドーム（福島県会津若松市）　○文・写真／川見洋介（本誌編集部）

男子 相生学院が他校を圧倒！ 2年連続3度目の優勝＆春夏連覇!!

決勝は、第1シードの相生学院（兵庫）と第2シード秀明八千代（千葉）の上位シード校どうしの対決になった。春の全国高校選抜では準決勝で対戦。相生学院に軍配が上がっている。

決勝まで、相生学院は1試合もセットを落としていないのに対して、秀明八千代は苦戦をものにしてきた。疲れの残る秀明八千代が相生学院にどのように挑むかに注目が集まった。しかし、相生学院の壁は高かった。

3試合同時に行われた試合の中で、まず先手を取ったのは相生のエース、菊地裕太。「（ミスを誘う）罠にかからないように1ポイント目から力を入れた」と第1セットを6・0で先取する。すると、ダブルスの山中瑠樹亜／名越大地、シングルス2の阿多竜也もそれに続きセットを奪った。

2セット目でも菊地の勢いは止まらず、重くて深いストロークによって白石を追い詰め、ポイントを重ねた。白石も粘ってつなごうとするが、その体力がなかった。「（タフな試合が続いて）腰を痛めていて気持ちが折れていた」と言い、2セット目は1ゲームを取るのが精いっぱい。最後は菊地がフォアハンドの強打を決め、6・0、6・1と1時間かからず1勝を挙げた。試合後、菊地は「出だしで良いテニスができた。相手が気持ち的にも技術的にも落ちたのでリードできた」と勝因を語っている。

王手をかけた相生学院。試合を決めたのは山中と名越のペアだ。マッチポイントで坂川のフォアを山中がボレーでブロック。坂川と鈴木の間にボールが抜けた瞬間、雄たけびとともに山中と名越が抱き合った。相生学院は2年連続のインターハイ優勝。そして、春の全国高校選抜に続く優勝を決めた。

優勝を決めた時の感想を山中は「いつも菊地と阿多に助けてもらっていた。最後は決めたかったので結構うるっときました」と喜んだ。大会前に大好きだった祖父を亡くしたという名越は「優勝して金メダルを届けるからと言っていたので、実行できてうれしい」と語った。

ダブルスとほぼ同時に勝利を挙げた阿多は「去年、自分のところで決められそうなところを決められなかった。今回は最後（自分も）勝って優勝できたのはすごくうれしい」と笑った。

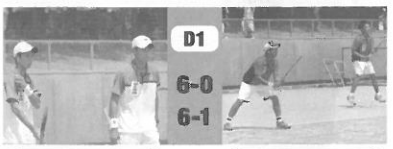
昨年のインターハイ、今年の選抜を優勝していることで常に追われる立場で苦しかったという相生・荒井監督。「それでも失敗しないための練習、失敗しても成功に結び付ける練習をしてきた」と王者としてのおごりはなかった。彼らの雄姿を見せようと荒井監督は決勝前日に1、2年生を呼び寄せた。『僕ら（1、2年生）も頑張る』という気持ちでやってくれるでしょう。来年の選抜も優勝します」と早くも次の目標を見据えた。

男子決勝戦

相生学院 3-0 秀明八千代

S1 6-0 6-1　菊地裕太③　白石 光②

S2 6-2 6-3　阿多竜也②　清水一輝③



D1 6-0 6-1

山中瑠樹亜③ 名越大地③　坂川広樹② 鈴木陸翔①

●監督 荒井貴美人
●選手 菊地裕太③、山中瑠樹亜③、平川暉人③、名越大地③、阿多竜也②

準優勝 秀明八千代（千葉）

●監督 鳥谷尾秀行
●選手 白石 光②、坂川広樹②、清水一輝③、鈴木陸翔①、三角理旺①

ベスト4 清風（大阪）

●監督 富岡宏之
●選手 大植 駿②、濱口昌孝③、五味駿一③、神谷和輝③、村田雄飛②

ベスト4 岡山理大附（岡山）

●監督 松村道則
●選手 星木 昇③、山本 新③、橋本翔弥③、加藤博夢②、小野蒼太③

平成29年度全国高等学校総合体育大会

第107回 全国高等学校テニス選手権大会

○期日／8月5日(土)～8日(火)
○会場／会津総合運動公園テニスコート、あいづドーム（福島県会津若松市）
○文・写真／川見洋介（本誌編集部）

男子 菊地裕太が三冠の偉業達成！

今年のインターハイは〝菊地のためにあった〟と言っても過言ではない。相生学院（兵庫）のエース、菊地裕太が団体戦、個人シングルス、ダブルスの三冠を達成した。これは2011年の後藤翔太郎（四日市工）以来6年ぶり18人目の快挙だ。

団体戦で圧倒的な力を見せつけた相生学院だが、その中でも菊地は群を抜いていた。シングルス1として5試合（8ゲームマッチを2試合、3セットマッチを3試合）を戦い、落としたゲーム数は総ゲーム数49のうち、5ゲーム。そしてその強さは個人戦でも変わらなかった。

団体戦の翌日から始まった個人戦。その初日、菊地はシングルス4試合（8ゲームマッチ）で3ゲームしか落とさず勝利。2日目はダブルスで3試合（8ゲームマッチ）、3日目にはシングルス、ダブルスを2試合ずつこなした（3セットマッチを3試合、8ゲームマッチを1試合）。ハイライトはシングルスの戦いだ。準々決勝、昨年のインターハイでベスト16に入った佐々木健吾（高松北）を6-1、6-1で倒すと、準決勝では団体決勝でも戦った白石 光（秀明八千代）に6-1、6-1と快勝した。このハードスケジュールに菊地は「インターハイは強い人でも体力で負けるというのが多い。この夏は大変になると思ったのでそこは鍛えてきた」と自信に満ちあふれた表情で語った。

決勝では、大分県勢で初めての決勝進出した田口涼太郎（大分舞鶴）との対決になった。これまで公式戦、練習試合で何度も対戦がある両者だが、菊地はいまだ「田口に負けたことがない」という。しかし、菊地は緊張から前日はなかなか寝つけなかったという。

いざ試合が始まってみるとその不安が形となって現れた。緊張からか動きが悪く、ショットの精度もそれまでより低いものだった。一方、田口の調子が良く0-3にされてしまう。ただ菊地はすぐに落ち着きを取り戻した。「何かしようと思うのではなくて、いつもどおりやること。しっかりラリーをしようと意識した」。

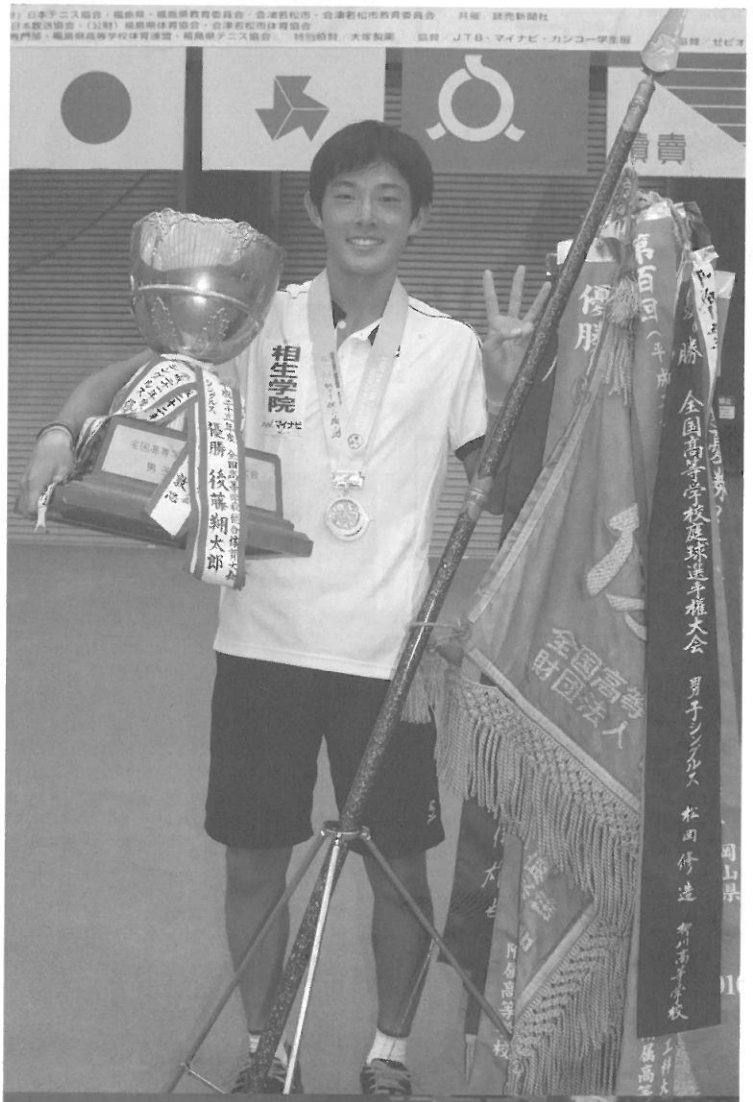
ここから菊地が怒濤（どとう）の勢いでポイントを重ねていく。菊地のテンポのいいストロークが相手コートの深くに突き刺さると、田口は持ち味であるフォアハンドでの攻撃を封じられ、一気に10ゲームを連取されてしまう。「ラリーをしていてもミスをしないし、ボールが重くて深い。自分が取れるポイントが見つからなかった」と田口は言う。

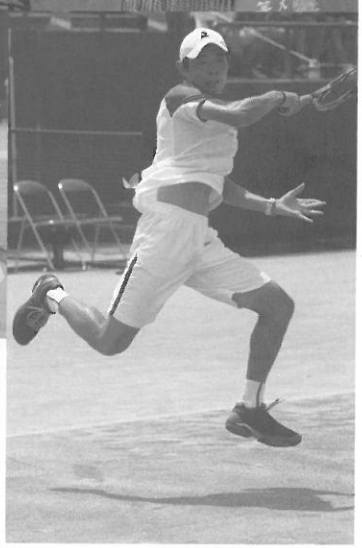
第2セット、菊地は第5ゲームにブレークを許したが、最終的に6-3、6-1と完勝した。

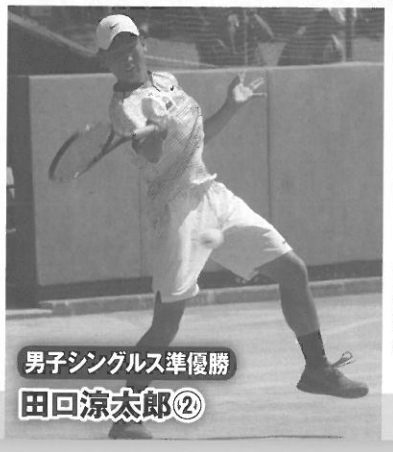
団体に続き、シングルスでも優勝した菊地は「第1シードで優勝できたのがうれしい。大会前から春夏連覇というのがあり、ほかの人より『自分が勝ちたい』というのは強かった」と喜びを語った。

1時間ほど時間を空けたあと、今度はダブルス決勝。菊地は相生学院のキャプテン、平川暉人と組んで出場。順調にベスト4まで進出したが、チームメイトの山中瑠樹亜／名越大地と準決勝で対戦。第1セットで5-7と、今大会、菊地が初めてセットを落とすと、第2セットも0-3までリードされた。それでも「相手のボレーがよかったので、リターンの位置を変えたりしてあえて打たせてミスを引き出せた」。そのセットを6-2として決勝に進出した。負けている状況でも冷静に自らが置かれている立場を判断できる、それが菊地の強みだろう。決勝の相手はまたもチームメイトの阿多竜也／丸山隼弥ペア。第1シードとして勝ち上がり、準決勝では1年生ペアの松下龍馬／間仲 啓（秀明英光）をストレートで下した。

決勝は互いに譲らず接戦になったが、第1セットは丸山のダブルフォールトで菊地／平川が7-5でセットを奪った。第2セットで、先にブレークしたのは菊地／平川だったが、阿多／丸山もブレークする。し←







男子シングルス準優勝
田口涼太郎②

「大会前の目標はベスト8だった」という田口（写真左）だが、「決勝まできたら優勝したかった」と悔やんだ。課題も見つかり、「菊地君みたいなプレー（深くてミスのないストローク）を自分のものにしたい」と力強く語った